

情報バック by KENICHI TAKEMURA

読み方

再び、東西対決へ！アンドロポフ・胡耀邦・レーガンの83年を読む

第83回

特別鼎談／いよいよ始まる「世界激変元年」の不安材料を総まくり

ソ連ではアンドロポフ新体制の下で、懸案のアフガニスタン、ポーランド問題に対する新たな外交戦略が始動している。これと相呼応するかのよう

一方、レーガン米大統領はフオークランド紛争以来、中南米に高まっている対米不信ムードを解消するため、ブラジルなど中南米四か国を歴訪。米国は、まず、足もとの中南米を固めて、新たな対ソ・対中外交をすすめる構えでいる。



関する報告を、同大会で行なった。つまり、中国は80年代後半に向けて、新しい国家体制を整えたといえる。外交問題をめぐっても、中国は中ソ和解へと歩み出しており、内

中・ソともに党官僚人脈が台頭

ソを軸にして、早くも大きく動き出したとみてよい。そこで、今回は、中国研究家の東京外語大学教授・中嶋嶺雄氏、ソ連研究家の青山学院大学教授・寺谷弘壬氏をゲストに迎えて、激変が予想される83年の国際情勢、およびその底流について、話合った。

竹村 中国はこれまで、米国が台湾へ武器援助するということ、中ソ接近の構えをみせて、「ロシア・カード」をちらつかせてきたが、このところ本格的に中ソ関係の改善に向かっていっているようだ。

竹村 具体的にいうと？  
中嶋 黄華外相のあとを受けて呉学謙・新外相が就任したが、いよいよ出るべき人物が出てきたという印象が強い。黄華は、米国系ミッションスクールだった燕京大学の出身で、中国きっての米国通。その黄華が引退して、共産主義青年団出身で、共青国際派の呉学謙が外相になったことは、中ソ同盟時代に備えたシフトといえる。これが、ひとつですね。もうひとつは、国防相が耿飈から張

愛萍にかわったことです。これも、外相人事と同じ意味をもったシフトといえます。  
竹村 なるほど。  
中嶋 耿飈は、中国共産党の中でもいちばん熱心な米中関係重視論者だった。ところが、今度の張愛萍は、毛沢東と対立した黄克誠・參謀総長時代に副參謀長を務め、フルシチョフに近かった人物です。つまり、対米関係重視から対ソ関係重視、対社会主義関係重視、第三世界重視というシフトへの転換に、非常にマッチした人間だということですよ。  
竹村 中国共産党は、党規約を改訂して、書記局を中心とする体制にしましたが、これも、そうした一連の動きと関係があるんですか。  
中嶋 あります。中国の政治を語る時、「収」と「反」という言葉が使われる。たとえば、毛沢東の政治は「反」。「反」というのは、引き離す、解放するといった意味で、政治を流動化させる中でカリスマ的に支配を貫徹しようとする毛沢東政治がまさにその典型です。ただ、「反」にはロマンはあるが、それでは国は成り立たない。やはり、収める必要がある。いまの中国は、その「収」にあたる。より官僚主義的なノーメンクラトゥーラ

② (7) 週刊ポスト 1983.1.1

# WORLD CONFERENCE

連載

## 世界の



寺谷弘壬

(青山学院大教授)



中嶋嶺雄

(東京外語大教授)

(赤き官僚組織)の体制が、中国にできつつあるとみていいですね。しかも、注目すべきは、五十三歳の胡啓立が書記局入りしたこと。彼は、かつての中国全学連委員長で、国際学連の中国代表としてブラハにもよく顔を出した人物です。長い間、行方不明だったんですが……。

竹村 当然、鄧小平が引きだしたわけですね。中嶋 そう。というより胡耀邦ですね。じつは胡耀邦も共青で、共青の総書記をしていた。寺谷 アンドロポフも、コムソモール(共産主義青年同盟)出身なんです。役員をしていた。そうすると、中ソは「共青時代」を迎えたということになる。中嶋 もともと、そのへんがいちばん共産主義者として正統な人ですね。

寺谷 いわば生え抜きですからね。革命の火の中を走り回って出てきたのではなくて、組織のハシゴ段を着実にのぼってきた、トップに躍り出た人たちですね。



■イラスト/太田宏明

(上)レーガンの中南米歴訪は西側陣営のタガの締め直し  
(下)胡耀邦もアンドロポフも国際共産主義人脈

### 多極化から再び二極化の時代へ

竹村 ところで、レーガン大統領の中南米歴訪については、どうみえますか。ブラジルやアルゼンチンは最近、ソ連にかなり近づきつつあるといわれてきました。寺谷 米国の巻き返しでしょうね。フォークランド紛争で、米国の中南米での地盤はゆるんだ。そのゆるんだところへコンクリートを打ち込んで、締め直



そうという狙いだ

と思う。それと、中南米の資源利権を失うまいとする、レーガン政権の努力のあらわれですね。中嶋 米国はいま、コストをかけている時期だと僕は思う。つまり、いま少し待てば、強いアメリカが再現できる。その時こそ新規まき直しを図ろう、というのがレーガン大統領の考えですね。しかし、米国の国民がそれに耐えられるかどうか……。辛抱できるか、ということですね。



中嶋 そうした世界再編の構図は、今回の全人代以降の中国を分析していくと、一層、はっきりしてくると思う。新憲法などをみると、彼らが必死になって社会主義のビジョンを、いま一度描こうとしているのがよくわかる。したがって、中ソ和解は、必然的に国際共産主義運動にリンクしていく可能性があるわけですね。そうすると、自由主義と共産主義の「競争」は、むしろ、これから本格的にはじまるとみたほうがいいのではないかと……。

寺谷 私は、現実の世界政治は、そう直線的に動くとは見ていないが、世界は多極化から東西二極化へ再構築される、という分析は確かに説得力がありますね。

中嶋 だから、これから緊張は激化する。二極化構造は、最終的に社会システムのちがいに収斂される。そこで、21世紀に向けて優劣を決める、本当の勝負をせざるを得ない時期がやってくるのではないかと気がします。(つづく)